

『郁達夫研究』

(東方書店、2003年2月)

国際言語文化センター教授 胡 金 定

郁達夫という名前を聞いたら、誰かなと思う方がいるかもしれない。郁達夫（1896～1945）は中国文学者である。彼は18歳で中国の中学校を卒業して、来日、翌年一高の特設予科に入学した。ついで八高（現名古屋大学）を経て東京大学経済学部に進学し、1922年に卒業した。通算して日本に10年間滞在していた。彼は高等学校時代に西欧近代文学に目をひらかれ、日本に留学した際、日本語を通してその時代の世界文学を数多く読まれた。郁達夫は日本の文学や日本文化を愛していた。さらにそのときに活躍していた日本の作家とも親交があった。日本通の中国作家であった。中国に帰国して、北京大学をはじめとして、多くの大学で教鞭を取った後、シンガポールの『星島日報』の編集者として招かれ赴任していた。新聞などのマスメディアでも活躍した。終戦直後にスマトラで日本憲兵に殺された。彼の人生は本当に波乱万丈であった。

本書は「郁達夫の小説の特徴」、「郁達夫の小説と日本文学」、「郁達夫の小説における美学と作風の変遷」、「郁達夫の小説における感傷」、「郁達夫の日記について」、「郁達夫と西洋文学」、「郁達夫における西洋の哲学・文学理論の受容」、「郁達夫の詩について」の8章から構成している。

比較文学の観点から郁達夫の文学について論じた本書は、郁達夫の小説と日本文学の関係に新しい視点を当てて、精緻に分析を行った。日本文学の中でも、自然主義文学、私小説などの近代日本文学特有の特徴と郁達夫の文学の関係について、歴史から説き起こし、郁達夫の小説におけるその影響関係を詳しく分析した。この分析によって郁達夫の小説と日本文学との関係を浮き彫りにした。また、郁達夫の文学作品には、「弱者」の主人公が登場することにより、中国近代文学史上において初めて「弱者の芸術美」が描かれた。この手法の系譜は宇野浩二の「一流の小説家は、貧乏、女性、病気の三つに

悩まされた体験の持ち主でなければならぬ」という文学観と酷似していることを見つけた。

郁達夫の代表作である「沈淪」の文体も中国文学従来の文体と違うことに、読みながら気がついた。この文体がどこから来たのかを調べるうちに、経済を専攻していた郁達夫に文学の魅力が再度感じさせた画家であり、詩人、小説家、評論家でもあった佐藤春夫の代表作「田園の憂鬱」から影響のあったことが分かった。佐藤春夫は新聞に「田園の憂鬱」を連載していた時、ちょうど郁達夫は東京に在住していた。友人を介して、佐藤春夫と知り合いになってから、親交を続けた。二人は文学論議などを常にやっていた。そこから、郁達夫は「田園の憂鬱」を手本に、「沈淪」を書いたのであった。この章では両作品の文体の相違点を鮮明にした。

郁達夫日記の量は他の作家と比べても特出である。彼の文学を研究するなら、日記を抜きにしては語れない。本書は郁達夫日記にも光を当てた。特徴として、作家自身の手によって整理し、形式を整えて、小説の代替物として発表したこと、日記という形式に託して、自分のすべてを赤裸々に公表したこと、個性を表現するなら日記形式が最適だと主張していたので、郁達夫の日記作品には彼自身の個性を見出すことができること、内容が豊富であること。以上の四つの特徴を突き止めた。

比較文学の手法を活用して、郁達夫の作品にはツルゲーネフ、シュトルム、ルソーなどの外国作家が影を落としている。また、ニーチェとシュティルナーからの影響も明らかにした。

郁達夫は漢詩人でもあった。彼の漢詩を「風景詩」、「抒情詩」、「詠史詩」に分類して論じた。本書が出版されて以来、中国文学研究や日本文学研究や日中比較文学研究に新風を吹き込んだと評価されているが、詳しくはぜひ一読願いたい。